

<<招待発表>> (9月17日 11:50-12:20)

【1号館(A棟)5F A501教室】

鹿児島若年層話者の音調選択の変異とその要因

太田 一郎

鹿児島語の日常語は、語彙や文法の面からはほとんどの方言的特徴が失われて標準語とほぼ同じになったが、語の音調(アクセント)においては現在も従来からの二型アクセントが維持されている。しかしながら、若年層話者たちは『全国アクセント辞典』(平山1960)掲載の従来型の音調型ではなく、標準語または東京語のアクセントと起伏／平板の型が一致する革新型の音調を選ぶ傾向が見られる(たとえば標準語で平板式の「かえで(LHH)」は、従来型では起伏式のLHLだが、革新型では標準語と同じ平板式LLHである)。本発表では、高年層10名と若年層20名の話者から集めた単語読み、文読み、台本のある談話などの音声資料に見られる(1)音調選択の世代差と、(2)若年層の社会的特徴と音調選択の関連との考察から得られた結果を報告し、(3)鹿児島語の日常語では語の声調からピッチアクセント的な音調選択へと移行している可能性を述べる。

<<招待発表>> (9月17日 11:50-12:20)

【1号館(A棟)5F A502教室】

言語行動の中の補助動詞「V-テクル」
—日本語教育における文法項目の扱いを考える—

筒井 佐代

近年、日本語学習者の多様化に伴い、日本語教育で扱われる文法シラバスの見直しが行われている(庵・山内2015)が、個々の文法項目の提示の仕方については具体的に論じられていないものも少なくない。本発表では、初級で学習するにもかかわらず使用頻度が低いとされる補助動詞「V-テクル」(山内2009)を例に、実際の会話における「V-テクル」が用いられる発話を分析し、会話における「V-テクル」の用法を再検討する。その際、「V-テクル」がどのような言語行動で用いられるのか、また前後の発話との発話連鎖や会話参加者の関係性に注目し、水谷(2015)が指摘する「V-テクル」の「感じのよさ」と「場」の共有について具体的に説明することを試みる。その上で、「V-テクル」がコミュニケーション上、重要な役割を果たす可能性があることを指摘し、会話教育における文法項目の扱いにおいて、言語行動の視点が不可欠であることを主張したい。

<<招待発表>> (9月17日 11:50-12:20)

【1号館(A棟)6F A603教室】

移動する人々の言語問題の射程
—言語能力の自己評価の語りに見る歴史性, 他者性, 社会的位置づけをめぐって—

村岡 英裕

接触場面における言語問題についてはこれまで多くの研究の蓄積がある(e.g.村岡・ファン・高編2016). 本招待発表では, より長期的にホスト社会の人々と接触を繰り返してきた移動する人々の言語問題を取り上げる. その理解の糸口として, 日本語能力に対する自己評価の語りに注目し, その語りに含まれる3つの領域—ホスト社会との接触の歴史性, 他者性, 社会的位置づけ—の関連性を事例とともに考察する. それにより, 自己評価の語りが当事者の視点からどのように多面的に構築されているかを論じ, 移動する人々の言語問題の射程を素描したい. また, 本発表では, 移動する人々の自己評価の語りに頻出する言語能力に対する解釈や理由付けを当事者の視点を取り込むために積極的に分析するが, それが接触場面研究にとってどのような認識論的, 方法論的な課題を提起しているかについても併せて論じる.